慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本に於ける親英主義の沿革
Sub Title	The origin and evolution of pro-British tendencies in Japan
Author	内山, 正熊 (Uchiyama, Masakuma)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1964
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.37, No.12 (1964. 12) ,p.213- 248
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	板倉卓造先生追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19641215-0213

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本に於ける親英主義の沿革

内山正熊

一　はじめに
二　親英主義の系統
三　英国傾倒の根拠
四　親英主義成長の契機
五　日英同盟の背景
六　親英主義促進の要素
七　親英主義の退潮
八　むすび

一　はじめに

近代日本の対外関係に於いて、最も親善懐旧の念を以て回顧し得るものがあるとすれば、それは、日英同盟に象徴を見る英国との関係であろう。明治維新当時、英国は鎖国から目ざめたばかりの日本の補導指南役であつて、開国以来の外交の大道は、要するに英国との提携ということであつた。(1) その英国と結んだ日英同盟は、日米安保条約とは対照的に熱烈な国民的

支持を受けたものであつて、むしろ「東洋のイギリス」たることを誇りとし、その親英主義は全くゆるぎないものであつた。それだけに、日英関係といえば、何よりも日英同盟に焦点が向けられ、それ以外の側面が軽視されている傾きがある。しかしながら、日英同盟は、いわば日英関係という巨大な氷山の一角にすぎないのであり、その奥深い基底は水中に没して視界から遮られているけれども、明治時代の我が国の英国に対する関心は、単純に親英感情といわれる如き情緒的なものでなく、深い根をもつ実体的基礎の上に立つものであつたのである。この親英主義の根拠は何処にあるのであろうか。

いうまでもなく、明治維新が西洋文明の模倣である以上、外国思想に心酔し異国のものを全面的にとり入れようとする一般的風潮の流れに乗つて、親英傾向が出来たことも否めないであろう。しかしながら、維新当時には幕末以来の強い親米感情、親仏傾向もあつたし、伝統的なオランダに対する親善感情、新興の雄邦プロシアに倣わんとする親独気運も存在していたに拘らず、何故にこれら他の諸国に対するよりも親英主義が遙かに優越して我が国の中に力を得たのであろうか。それは、当時世界帝国として全盛時代を誇つた英国の驥尾に付して努力精進した我が国の意欲的な態度を英国が買つて、日本を善導しようとしたことが我が国に受けたことにもよるであろう。しかし、このような親英主義が生れるにはそれだけの原因があり、その物心両面にわたる有形無形の英国からの圧力影響と、これに応ずる我が国の受容性とを知るならば、親英主義がいかに深く広く行きわたり、強い支持地盤をもつているかに一驚せざるを得ないであろう。とりわけ幕末以来、英国の対日態度には頗る強硬冷酷なものがあり、ハリスの穏健友好的な米国の態度に較べれば、パークス英国公使の不遜な高圧的態度は、反英乃至排英主義を惹き起して然るべきであつたのに、しかも明治政府の基本姿勢は全く対英屈従一辺倒であつた。当時、英国公使の頤使に唯々諾々たる日本外務省は、恰かも英国外務省霞ケ関出張所という姿を呈したのである。

それにも拘らず、日本が英国に傾倒すること非常なものであつたのは、日本が自ら進んで英国を模範とし、これに師事して国をあげてひたすら近代文明摂取に邁進した時代的背景と共に、英国が米仏独等他の先進諸国と異つた性格をもつて居

り、そこに日本と体質的に似通つた点があつたからではなかろうか。一体日本人は、新奇を好む心と古きを尚ぶ心、進取と保守、外国思想に心酔して斬新を好むと共に、愛郷、愛国的熱情のつよい面をもつているから[2]、英国のような改進と守旧とが適当に混合した特色をもつ国は、同じ欧米の中でも日本人にとつて最も模範とするにふさわしい国柄であつたと思われる。それ故に、英国を理想的な先進国として尊敬し、ひたむきにこれに学ぶという純粋な心情を抱いたのも肯けるのであつて、これに対して、英国側も熱意を以て日本に対する教導を行い、ここにこの日英両国の接近交情は、東西の隔りを超えた史上数少い「君子の交り」[3]にまで高められたのであつた。今日、過去の日本が東洋の英国になぞらえて奮闘努力した跡を迹づけてみるとき、単に外交上のみならず、精神的、文化的、政治的、経済的、軍事的のあらゆる面にわたつての我が国の英国に対する傾倒振りは、今日の想像に余るものがあつたのを見出すのである。いまこの親英主義の生成過程を回顧するならば、そこに拝英主義ともいうべき日本の英国傾斜の背景が浮び上つて来るであろう。

(1) 吉田　茂　回想十年　第一巻　昭和三十二年　二五頁
(2) 野村兼太郎　日本経済史　昭和二十八年　九頁
(3) 芦田　均　新興日本の将来　昭和十一年　二二三頁

二　親英主義の系統

我が国の対英交渉の歴史を顧みるならば、古くはウィリアム・アダムス（三浦按針）が家康の顧問として重用され、リチャード・コックスが平戸に英国商館を設置して日英修好を温めた昔は別とすれば、十九世紀初頭東洋に進出した英帝国主義の脅威を身近に感じた我が国にとつて、英国は「英夷」として恐るべき存在であつた。殊に英国が、幕末薩長に対する攻撃を敢行して西洋兵術の威力を示して以来、我が国に恐英主義を生み出すに至つたのである。しかし、この恐るべき英国は、我

が国に対英恐怖をかり立てたのみならず、却つて英国富強の由て来る所以を探求せしめたことは注目すべきである。例えば、高野長英の如く、夢物語を著し、英国が世界の強大国であることを暗示して、英船打払いの無謀なる旨を説いたのであつて、日本は、むしろオランダだけと接触するよりも、面積、人口ともに我が国と大差ない島国であるのに世界に覇を唱えている英国と接近することによつて、外国の真実の事情を詳かにする方が得策であることを述べている。[4] 殊に我が国人のながく伝統的尊敬の対象であつた中国が英国に敗れ去つたのは、中国が守旧で英国の研究を怠つた結果と見て、我が国はこの轍をくり返すことなく、進んで英国から西洋文化を学ぶべしとしたのである。かくて、文久二年の遣欧使節を送ることになり、その渡英の結果は英国が恐怖すべき海賊国でなく、立憲政治の先進国であることを我が国に教え、ここに対英恐怖は転じて英国組織に対する崇拝の思想に変つたわけである。

この英国を模範として新生日本の進歩改革をはかつた先達として、先ず第一に指を屈しなければならないのは、福沢諭吉先生である。西洋文明を我が国に輸入し、民情を一新して我が国を文明国に伍するために、福沢先生は、英国に倣つて民主主義を行う必要を力説したのであつた。この点に於いて、先生は純粋の意味における親英主義者であつて、実に親英主義の理論的根拠を提供したといえるのである。先生は、その西洋文明を紹介されるに当つて、「西洋事情」、「民情一新」、「英国議事院談」などに於いて範を英国に求め、例えば、「今我国ニ於テ国会ヲ開クニ当リ、其模範ヲ西洋諸邦ノ中ニ取ラント欲セバ、議員選挙ノ一事ニ就テハ英国ノ法ニ倣フヲ以テ最モ便ナリトス」（国会論）と述べ、国会を開いて議会政治を行つて国に安定的基礎をつくり、「自から英吉利の風に倣ひ、東洋に新に一大英国を出現して、世界万国と富強の鋒を争ひ」、「日本をして真実東洋の英国たらしめん」（時事小言）とされたのであつた。実際、情理を尽して親英論を展開し、英国敬愛の口火を切つたのは福沢先生であつた。例えば、先生は「民情一新」において、その独特の説得力ある筆法で英国の政治を紹介されている。「今世に於て国安を維持するの法は平穏の間に政権を受授するに在り、英国及び其他の治風を見て知る可し」という

「英政を美なりとして之を称賛するの点は、既往の結果に在らずして現今将来正に人文進歩の有様に適して相戻らざるの機転に在るものなり。英国に政治の党派二流あり。一を守旧と云ひ一を改進と称し、常に相対峙して相容れざるが如くなれども、守旧必ずしも頑陋ならず、改進必ずしも粗暴ならず、唯古来の遺風に由て人民中自から所見の異なる者ありて双方に分るゝのみ。……等しく是れ英国文明中の人民にして全体の方向を殊にするに非ず、其相互に背馳して争ふ所の点は誠に些細のみ。之を衣服に譬ふれば、守旧も改進も其服制の長袖か筒袖かに於ては固より相同じと雖ども、唯縫裁の時様のみを異にする者の如し。今の魯西亜にて王室と虚無党と相敵し、昔年我日本にて攘夷家と開国家と相容れざりしが如き者には非ざるなり。……之を要するに英の政府には一時一定の論ありと雖ども、永世不変の恒なきものゝ如し。……田舎に簡単なる水車あり、車の軸より丁字形にして両腕を出し、腕の端に水槽を附して流水の筧より落るものを受け、其水一槽に満れば則ち転じて他の一槽を出現し、一槽又一槽、満れば落ち、落れば復た昇り、其機転甚だ奇妙なり。若しも此水車の軸を支へて転回を止め、片腕の一槽のみに水を受けて其圧力に抵抗せしめたらば、日ならずして腕木は打折せんのみ。英の政府も亦この水車の如きものにして、千八百年代文明の進歩に遭ひ、よく其圧力に堪へて嘗て政治の仕組に震動を覚へざるは、政党の両派一進一退其機転の妙処と云はざるを得ず。」（福沢諭吉全集第五巻四四頁）と英国政党政治を推賞されたのみならず、更に英国民の王室に対する態度が忠誠無比であることを礼讃されたのである。即ち、「王室を尊崇するは英国一種の気風にして、仮令ひ如何なる自由党の劇論家にても公然として王室の尊威を攻撃する者なし。啻に公然ならざるのみならず、其本心の私に於て然るものゝ如し。蓋し英人の気象は古風を体にして進取の用を逞ふする者と云ふ可し。或は其度量寛大にしてよく物を容るゝ者と云ふも可なり。彼の仏蘭西其他の人民が自由の改革と云へば、直に国王を目的として之を攻撃し王室恢復と云へば直に人民の自由を妨げんとするが如きものに比すれば、同年の論に非ず。」（同上四五頁）といわれて、上下和親の民主主義国の典型として英国を称賛されているのである。先生はまた、英国が条約改正に対して欣然と応じなかつたときも、「英国人の心

術決して日本国に害を加えて終に之を萎縮衰弱せしめんと欲する者にあらず。我輩を以て英人の心を忖度すれば、彼等は文明の先進、大人を以て自ら居り、其の日本人を見ること固より小児にして然も教へて導くべき小児なりと認め、政治上に外交上に又智育世教上に専ら之を教導して共に文明の方向を与にせんことを勤めたるものゝ如し。殊に故パークス公使が勤仕の時代には往々過剰変則の行動ありしやに聞けども、その過剰なるや決して我を害せんとするの過剰にあらず。いわば、教師が生徒に教えて図らずも怒声を発する者に異らず。……之をたとへば、開国以来今日に至るまで我日本人が外国交際に従事したるは弱冠の少年が家政を司る一般往々不案内不行届の廉も少なからざりしと雖ども、英米等の国々が我釁に乗ぜざるのみか、却て之を弥縫して常に平和策に出たる趣は、心ある大人が少年に交るの傍暗々裏に其後見職を勤めたるものゝ如し。（明治十九年九月六日時事新報社説）と述べて、英国の立場を擁護されている。

この福沢先生に発する純正な親英主義の流れは、明治、大正を経て昭和の今日に至るまで脈々と後をひき、隠然たる親英主義者の存在は跡をたたなかつたのである。例えば、板倉卓造博士は、その「国民政治読本」の冒頭において「英国の憲政を目標として、日本の政治をそこまで導かん」と述べて居られるのに見られるように、君主政治の理想の姿を英国に見出し、「皇室に対する英人の思想」を羨望して、「西洋には、古から共和論と王政論との論争が激しかつたけれども、一切の諸理屈を離れて、英国のみは独り総ての危険に超越して、永遠に無限に栄ゆるの基礎を築いて居る」[5]とまで讃嘆されているのである。板倉博士はまた、ローズベリー卿が、「我々が国王を尊敬するのは、国民の象徴（シムボル）として之を尊敬するのであつて、即ち国民自尊の意味に於て之を為すに外ならない。国王は、例へば軍隊の軍旗のやうなものである。軍旗の物質的材料その物は何であろうとも、軍旗は軍隊の象徴たるの意味に於て、之を尊重するのである。即ち軍旗を尊重するのは、取りも直さず軍隊自ら尊重するものに外ならない」と云つた言を引用して、「国王を以て国民に超越したもの、若しくは国民と隔絶したものとし、恰も別人間もしくは神様扱いにする思想を排したもので、国王と雖も世間並の人間で、其の英人たるに於て他の英

人と何等優越したる所なき普通平凡の人間である。夫れが伝来の系図に依り、偶々王位に就いたことに依つて、内外に英国民を代表するに至つたのである。英国民を離れた英国王なるものが存在する訳はない。」と主張されたのである。

この三田派に次いで、親英主義を高揚したのは大隈重信を中心とする早稲田派であろう。かの対外強硬高姿勢を以て鳴つた大隈が、「我が邦も亦夫の順正の手段と着実の方便とを利用し、以て斯政治を改良前進し、夫の英国と並び駈走、或は之に超せんことを冀うなり」といつて、「ひそかに英国を欣慕せざるをえず」（明治十五年立憲改進党組織に際し党人に告げた演説）ともらしたことは、当時の識者の多くが抱いた心事を表明したものというべく、親英主義の根源は、このような英国を理想とする国民的願望にあるといえよう。また親英主義を理論的に推賞したのも、早稲田派に少くなかつたのである。例えば、英国流の立憲政治論を主張した小野梓は、「顧みて泰西の実例を求むるにプロシアは守旧に拘泥してその国を疲らし、偶々過激の徒を多からしめたるものなり。英国は順正の手段と着実の方便を以てその政治を改良前進したために一国の静謐人民の安穏を致せしめしなり。之に反して仏国は急進過激の変革を施し以て社会の安寧を紊乱し却て政治の進行を妨害したるものなり。顧うに満堂の諸君は斯の帝国をしてプロシアに倣わしめんと欲する乎、英国に倣はしめんと欲する乎、フランスに倣はしめんと欲する乎。」と訴え、また大隈の改進党の代弁者として、加藤政之助は、「我党は仏国改進主義者流の轍を踏むことを欲せず、実に英国改進者流の轍を踏まんことを欲する者なり。我党は粗暴過烈な腕力に訴ふるを好まず、着実穏和真理に訴へんことを企つる者也。」[6]と英国流の穏健漸進主義を高く標榜したのである。

このような形で随時適切に展開された福沢先生を筆頭とする純正親英主義者の議論が、いかに我が国の人心を動かし、親英に向わしめたかについて、今更喋々を要しないであろう。わが国に英国心酔主義者が続出したのは、このような英国讃美論が迎えられたのと共に、明治以来少壮有為の士や裕福な階級の子弟が多く英国に留学したことにもよるのを見逃すことが出来ない。元来英国に留学生を派遣するという着想は、福沢先生に始まるものであつて、先生の建言が採用されて英国留学

が緒についたのである。

この英国留学生は、後年日本近代化の中枢をなす人物となつたのであつて、文久三年幕府の遣欧使節として福沢先生が渡英見学の結果、英国政治制度に注目されて以来、最初のものとして文久三年長州藩から渡英した伊藤、井上、山尾、野村、遠藤の五名の留学は、英国に於いて最も発達したものと思われた海軍を研究することを目的としたものであつた。この留学の結果、御殿山の英国公使館焼打放火犯であり、攘夷の先頭を切つた長州人の伊藤俊輔、井上聞多の二人は、英国に行つて彼等が煉瓦塀に自分の頭をぶつけることの無益であることを悟るに至り、藩の同志に攘夷の愚を忠告すると共に、欧米崇拝の先端を切る文明開化の推進者となつたのである。大久保利通、木戸孝允も明治初年欧米を視察するや、流石に英国の富強に驚き、「英国は欧州の一島国なり、人口三千二百万余、ノルマンジー・ウィリアム以来僅か八百年余にして国威の海外に振い、万邦を膝下に制し、今日の隆盛に至る者は、蓋し三千二百万余の民己の権利を達せんがため其国の自主を謀り、其君主も亦才力を通暢せしむの良政あるを以てなり」として、その帰朝後著した文書は英国富強の原因をその良政に帰し、我が国の之に及ばない理由を政治制度の欠陥に求めたところの代表的英国崇拝思想を表明している。木戸の建白書も亦、「英国の人民は概して政府与うる所の権利尽きざる者あるなし」と英国の自由憲政主義を賞揚している。当時如何に英国崇拝の風潮が強かつたかは、伊藤自ら、「日本は欧州殊に英国の風俗習慣を移殖すること危険の恐れあるまでに疾し。日本少壮は諸事奔走して先づ英国に留学し、其教育を受けて我文明の基礎たる大思想を遽かに其の脳中に注入」云々（伊藤博文秘書類纂中巻二〇六頁）と述べていることからも明らかである。伊藤は必ずしも向英一辺倒ではなかつたに拘らず、英国を畏敬したのは英国が恰も明治政府の後見補導役である英国に対し感佩おく能わなかつたことによるのである。事実維新当時の指導者は、殆んどすべて英国の権威の前には全く頭が上らなかつた。例えば、伊藤が英国公使ハリー・パークスに対する讃辞に於いて洩らしたことは、当時の為政者が親英主義たらざるをえなかつた事情を明らかにしている。すなわち、「彼の我国に在勤せし

は十八年の長きにわたり、徹頭徹尾明治政府の熱心なる同情者を以て自任せり。就中、維新当初当局者の施政に無経験なりし時代に於いては、非常なる熱心と好意とを以てたえず有益なる助言を与え、熱心の極或いは殆んど干渉に類する程度に達したることあり。然れども日本今日の進歩の彼に負う所少からざるは、予の断言するを憚らざるところなり。殊に余の如きは、彼の好意を受けたること最も多き一人にして、王政復古の際兵庫に於て外国使臣に対する新政府確立の通告及び備前兵暴行事件処分以来彼とは最も親密なる関係を有したり。……当時彼の予等に対する態度は、教師の生徒に向うが如く恰も文明政治の指南者を以て自ら任ずる風を示せり。」[7]の一節は、ただに伊藤のみならず、当時の我が国為政者すべてが体験した英国に対する感情を如実に示すものといえるであろう。

ここに我が国の親英主義の中には、いわば福沢流の正統的な親英主義と伊藤流の便宜的な親英主義とがあるのを知るであろう。前者の方は恐英から拝英を経て親英となつたのに対し、後者は恐英から反英となりそれが転じて英国に傾斜したのである。前者は素直に英国を理想とし模範とするから、英国心酔の傾きがあるにせよ、[8]あくまで英国を敬愛して親英主義に一貫するのである。これに対して後者は、必要に迫られてやむをえず便宜的に親英主義の立場をとつたのであるから、事情によつて他国に近づき、これに学ぶ方がより有利であると見れば、その親英主義から離れ去ることも自然の成行といわねばならない。現に伊藤の如き、英国の立憲制度を移入すれば「王ハ君臨スレドモ統治セズ」の幕府時代に帰るおそれあるとし、それは到底我が国と適合しないとして、英国政治思想を排斥して、シュタイン、グナイストに学んでドイツ流の憲法制定にふみ切つた次第からもそれは明らかであろう。[9]彼が日英同盟交渉当時ロンドンに直行せず、日露協商の方に傾いたことは有名であるが、伊藤のみならず、便宜的親英主義者は軍部をはじめ少くなかつたのである。明治十四年の政変によつて、大隈が下野したことは、また同時に英国流の立憲政治論者の英国議会制度採用拒否を意味し、親英主義の後退を示したかに見えるが、前者の流れは、日英同盟の提唱によつて復活するのみならず、その成立によつて親英主義は最高潮に達するのである。

（4）高野長英全集　第四巻　九頁
（5）板倉卓造　国民政治時代　大正十五年　一九頁―二四頁
（6）浅井清　明治立憲思想史に於ける英国議会制度の影響　昭和十年　三三八頁
（7）藤公余影　明治四十三年　九二頁
（8）福沢先生は必ずしも英国一辺倒でなかつたことは、「理のためにはアフリカの黒坊にも恐入り、道のためには、英吉利、亜米利加の黒艦をも恐れず、国の恥辱とありては、日本国中の人民一人も残らず命を棄て、国の威光を落さざるこそ一国の自由独立」（学問のすゝめ初篇）であると力説されていることからも明らかであろう。現に、明治十九年、日本人船客すべてが溺死したに拘らず、その責任者たる英国人船員はすべて無事という事件において、当の英人船長が英国領事館裁判において無罪の判決を受けるや、「ノルマントン号沈没事件を如何せん」と再三、英国の非道を痛論し、英国に対しても堂々批判の筆をとつて居られるのである。
（9）末松謙澄「伊藤公ノ欧州ニ於ケル憲法取調顚末」（国家学会雑誌、第二十六巻第一二号）

三　英国傾倒の根拠

英国は、峻厳強硬な態度を以て我が国に迫ることが多く、殊に明治初年のパークス公使は、米国のハリスとは異つて尊大不遜、威嚇恫喝的態度をもつて我が政府当局に当つたに拘らず、明治維新以後、我が国に反英ではなく親英主義が隆々と盛り上つたのは何故であろうか。それは何よりも先ず、明治新政府の生い立ちが英国に負うところ大であつたからにほかならない。すなわち幕末、仏国はじめ列国代表があげて幕府を応援していたとき、英国は夙に朝廷の立場をみとめ、パークスは「勤王派の心からの味方であることを自ら証明し」「力の及ぶ限り大君の没落に貢献」し、新政府を擁護したからであつて、新政府の通牒に接するや、卒先して天皇に謁見し、新政府の正統主権を肯認したのがパークスであつたからである。[10] 事実明治政府の国際的承認、対外的地位の確立は、パークスの決断、支持によつて始めて実現したといつても過言ではない。英国は、仏独伊公使が長州征伐のとき幕府を支持し、米国も中立を保つていたときにも、日本の政治的容体をよく診察し、日本国民の脈をとつて、天皇が日本の君主であり、大君はその代行者であることを認め、朝廷を支持したのであつた。[11] いいかえ

るならば、英国は列国に先んじて天皇が主権者であることを承認したのであつて、明治政府はこれに対し特に感謝しなければならなかつたわけである。全くアーネスト・サトウのいう如く、日本はパークスの努力に負うところ多大であつた事実を明らかに認めなければならない。若し彼が維新の革命に際し別途の態度に出て、その同僚の多数に雷同したとしたならば、当年の内乱は決してしかく迅速に治らず、天皇親政の大業は至大の難関を迎えたに相違ないのである。さればこそ、明治二年英国皇族エディンバラ公の来朝に際し、明治天皇自ら「国内の過ぐる擾乱時期に当りパークス公使の助言忠告により常に最大の援助を得たることをこの重要なる機会に於て深謝し、朕のこの謝意を女皇陛下に伝達せられんことを希望す」と宣われたのであつた。パークスの態度を「頗る暴慢無礼を極め候」とまで嘆じた右大臣三条実美も、明治四年英首相に送つた信書に於いて、「英国公使サー・ハリー・パークスは、我国に在りて多年その職務に当り我国の事情に精通し、彼我の親好関係を固むるに努力し、忠実且公正にその任務を遂行せり。……加之、我が政府は彼を後援者として厚く信頼し、各国との種々の交渉に於て屢次彼の封助を受けたり。我が政府は之に対し如何に感謝を表すべきかを知らず」[12]と述べているのである。いうまでもなく、倒幕の功労者としてのパークスの活動には鮮立つたものがあるにはちがいないが、しかし彼をしてかかる業績を生むに至らしめた根底は、更に溯つて求められるであろう。すでに、幕末の初代英国公使オールコックは、米国のハリスに劣らず我が国に対する誠実な同情者であつた。彼が我が国の金貨流出を憂い貨幣改鋳を勧告したことは、ハリスの阿片禁制の忠告にも比すべき我が国にとつて重要な寄与であつた。オールコックの誠意と同情とは、彼が日本を未成熟な少女にたとえ、「もしあなたが自分の情熱だけに耳を傾けていまこの娘を自分のものとするなら、これから先の美しさを損うだろう。いま手をふれずにおくなら、この娘は成熟して、その美しさはあなたの幸福と楽しさを増すであろう」[13]といつていることからも分るであろう。彼はまたパークスに先んじて、朝廷政権の正当性を認識した具眼の士であつた。すなわち、天皇が日本の世襲の君主であつて、大君はその代理者又は総司令官として天皇から叙任されたものであることを指摘し、日本政

治の二元性、京都には名目上の君主が住み、他方江戸には事実上の統治者である大君が住んでいることを知つていたのである。[14] このような先見は、パークス着任以前からながく日本に在つた優れた学者外交官アーネスト・サトウの歴史的知識によつて啓発されたのであることを看過すべきでない。サトウは明治維新を革命と見なさず、単に帝権の実力回復運動であるとしたのであつて、この見地に基くパークスの発議はよく列国外交代表を動かし、新政府のための有力な援助を与えることになつたのである。したがつて、明治初年における英国公使の威信は全く素晴らしかつたのは当然である。

然るに、勤王派の味方であつた英国に対して、それまで我が国は英国に対して酬いるところなく、逆に天皇謁見式に向うパークス公使を襲撃するなど、狂信的な攘夷活動の矢面に英国は立つていたのである。[15] それだけに、維新以後外国人に対する敵意の根絶を期せんとした政府が、英国に対して殊のほか鄭重な低姿勢であり、逆にパークスが強硬な高姿勢となつたのは致し方ないところであつたであろう。特に明治政府劈頭の困難は、財政問題であつたが、新政府に引継がれた賠償金、債務の処理に当つて、パークスが明治政府のため尽力した功績も忘れるべからざるものがあつたのである。例えば大隈重信が苦心した横須賀造船所恢復及び軍艦兵器買入れに当つて、フランス公使は五〇万弗の証文をつきつけ、幕府のために最新式の軍需工場が官軍に押収されるのを妨げたとき、パークスは大隈に対して横浜の英系銀行オリエンタル・バンクからの金融斡旋を試み、そのために辛じて危機を脱することが出来たのである。大隈は、「当時外交の任に鞅掌せし余は常に英国公使と相論争するの地位に立ちたりき。嗚呼平素諸般の交渉談判をなすに当りては強硬下らず、論争譲らず、壮言励色、寧ろ彼の嫌忌する処となりしもの、一朝困難に遭遇したりとて其周旋を請ひ其救援を求むるが如きは、焉んぞ得て為すに忍ぶ処ならんや。……斯くて余は幾たびか逡巡せり。幾たびか躊躇せり。さればとて別に調達の策なし。仏国の要求は日に益々急にして猶予すべくもあらず。」遂に「忍ぶにあるのみ」として、パークスを訪ね紹介を請うと、「パークスは何時に似ず温言にいと容易に其紹介を承認したり。彼の仏米諸国が幕府に左袒する傾向ありたるにひきかえ、英国は朝廷に好意的で、彼の頑

剛なる公使パークスが平素の交渉談判の上より稍〻嫌悪しつゝある余の請求を快く容れしに至りては、実に意外の感ありしのみならず、深くその好意を徳とせしなり。オリエンタル・バンクが焦眉の急を救いしより我国政府は深くその好意を感じてこれを徳とし、爾来相互の関係頗る親密となり、鉄道布設、外債の募集、造幣局の創設など苟もその材料技術を外国に仰がざるべかりしものは、大概オリエンタル・バンクの手を経る」ことになつたのである。後年大隈が「調達の策已に尽き他国の要求日に益〻急にして進退維れ谷まるときに当り、活路一方に開けて五十万弗の巨額は意外の辺より出来せり、是を以て勇気振作すること一番」（昔日譚）と述懐しているのをみても、当時いかにパークスの恩恵に浴すること夥しかつたかが知られるであろう。また鉄道敷設の必要を強調した大隈、伊藤も当時の財政状態では、とても鉄道を敷くための費用など出そうもなかつたが、オリエンタル・バンクとの契約で英国で年利九分の公債百万弗の募集を行い、英国人技師モレルの監督の下に工事は進み、明治五年新橋―横浜間の鉄道は完成したのである。しかも、この鉄道敷設に当つては、すでに幕府が米国使臣館書記ポメルトンに対し慶応三年十二月二十三日附で江戸・横浜間鉄道免許書を与えていたに拘らず、パークスは鉄道建設の必要を説くと同時に、鉄道は日本人の手によつて経営すべきもので外国人に土地を貸与し利権を賦与すべきではないといつて、米国からその敷設権を奪いとり、強引に英国の手で建設したのである。[17] 更に、明治政府が英国に忠順たらざるをえなかつた理由として、当時英国に対して財政的に負うところ甚大であつたことがあげられねばならない。周知の如く、封建制度一掃の任務をもつ明治政府は、歳入の三分の一を占める華士族の禄制整理のために、従来の家禄に代つて禄券を交付したが、そのための資金は、実は英国において発行された七分利附外国公債英貨二四〇万ポンド（邦貨一、一七二万二千円）からえられたのであり、それも米国では成功せず、結局英国に頼らざるをえなかつたのである。いわば、日本の封建政治の大掃除には英国の資本主義の助けを借り、士族の家禄買収までがロンドンの銀行家の厄介になつていたわけであつて、[18] この紐がたたれない以上、日本は英国に頭が上らなかつたのは当然といえよう。

パークスが後進の小国に対し威圧を以て臨み、傲慢無情の人として悪名高く、英国人に対して反感を惹き起す傾向があつたけれども、アーネスト・サトウをはじめ我が国に理解ある有徳の人も少くなかつた。その一例として、英軍医ウイリスをあげておかねばならない。伏見鳥羽の戦に大山巌自ら奮戦して負傷し、西郷従道また重傷したとき、西洋医による治療を痛感し、アーネスト・サトウを通じパークスに斡旋依頼したところ、パークスは快諾して、英艦乗組軍医ウイリスを見舞として派遣した。以来、彼は官軍の東征に従つて、排外思想盛んな当時、遠く北越東北地方まで赴き治療に従事した。敵味方を問わず病院に収容治療した彼は、その熱心懇切なるに何人も敬服せざるはなく、多くの人命を救護して、至仁至厚を謳われ、その病院は菊花紋章を下賜されて天朝病院と称せられた。西郷隆盛は深くその人徳に感服し、礼を厚くして薩摩藩に招いたが、後の刀圭界の逸材はウイルスの下から輩出したのであつた。[19] 城山公園における頌碑には、「泰西の学我国に入りしより百事一新、新旧の物皆革まる中に就て医術の進歩最も著大なり。英国大医ウイリス氏の如き即ち此進歩に与て多くの功労を貽せし恩人なり。……今や我県大医輩出し司命を全うする者皆氏が薫陶の鴻恩に因らざるなし。顧れば氏の如き啻に維新の当時兵馬の間を馳駆せし労と、魔域後進子弟に恩師と仰望せらる而已に非ず、又是の我国文明の恩人という過賞に非ざるべし。」[20]とあるが、各方面に優れた英国人が指導の功績を残したのを見出すのである。

就中、明治政府が英国に対して想像以上に傾倒していた理由として、その基礎未だ定まらなかつたときに当つて、英国から受けた好意斡旋の数々が極めて日本にとつて貴重なものであつたことが顧みられねばならない。その第一は、明治七年の征台役に際して、我が国の船舶で軍事輸送にたえるものは僅か数隻にすぎなかつたため、政府は米国太平洋汽船会社に援助を求めたところ、米国が局外中立の故を以て協力を拒んだ際、政府顧問であつた英人キャプテン・ブラウンは急遽香港に走つて外国船十三隻を購入し、軍輸送船舶の組織に当つたのみならず、[21] この結末をつけるべく清国に渡つた大久保利通は、北京で交渉に入る前天津にウェード英国公使を訪ね、彼の斡旋によつて償金を得ることが出来た[22]のであつて、幼児期の日本外

交は、英国を顧問後見役に仰いで、はじめて対外交渉に成功を収めることが出来たのである。次いで明治十年、明治政府の基礎をゆるがす試練であつた西南の役に於いても、その勝敗の鍵は海上輸送の船舶を手に入れるか否かにあつたとき、政府当局は再びブラウンに援助を求め、彼の整えた輸送船を徴用することによつて海路九州に兵を送り得て内乱を鎮圧することが出来たのであつた。彼が日本政府と日本海運のために尽した功績は、まことに偉大であつた。いうまでもなく、当時の特筆すべき英国の対日寄与は、日清戦争直後の三国干渉に際して、英国はこれに加わらなかつたことであつた。独露仏の行動は日本で特にロシアを不人気にしたが、反対に英国の態度は、大いに感謝されたのである。日英同盟と日露戦争は、この英国不干渉の直接的結果にほかならなかつたのである。(23)

(10) アーネスト・サトウ著　一外交官の見た明治維新（坂田精一訳）　下巻　一八七頁
(11) 右　前掲書　上巻　二一六頁
(12) 信夫淳平　明治の外交史上に於けるパークスの位地　国際法外交雑誌　第二十八巻二号　一七一頁
(13) オールコック著　大君の都（山口光朔訳）　上巻　三一八頁
(14) 右　前掲書　中巻　二二三頁
(15) 岡義武　黎明期の明治日本　一九六四年　三一頁
(16) 明治・大正・昭和歴史資料全集　上巻　三五頁―三七頁
(17) 松井清編　近代日本貿易史第一巻　昭和三十四年　二八五頁・六頁
(18) 大蔵省編纂　大内兵衛・土屋喬雄校　明治前期財政経済史集成　第十巻　六頁。清沢洌　外政家としての大久保利通　昭和十七年　三七頁
(19) 元帥公爵大山巌　二九〇頁
(20) 岡義武　前掲書　五、明治初年の日本とW・ウイリス参照
(21) 日本郵船株式会社七十年史　七頁・一二頁
(22) 外務省蔵版　日本外交文書　明治年間、追補第一冊一四六頁「英国公使ウェード氏の仲裁」
(23) サー・フランシス・ピゴット著（長谷川才次訳）　断たれたきずな　上巻　二四頁
親日英国人は数少くないが、本書の著者ピゴット少将の如く、明治・大正・昭和にわたつて日本の姿をよく観察し、日本人の心の琴線にふれ

るような真情あふれる洞察を行つた英国人は少いと思われる。筆者が本稿を草する当つて最も参考になつたのも、この Major-General F. S. G. Piggott, C. B., D. S. O.; Broken Thread, 1950 であつた。

四　親英主義成長の契機

「東洋の英国」を築かんという念願に燃え、自ら文明開化の推進力たらんという抱負に燃えて、当時の少壮人士は続々海外留学の途に上つたが、その多くは英米に学び、特に優秀な留学生は英国に多かつたことは注目すべき事実である。その適例は、帝国大学より明治三年派遣の第一回留学生四名の中、菊池大麓などは英国に派遣されたが、第二回留学生一〇名の中、杉浦重剛、入江陳重（穂積）など八名までが英国に留学したのであつた。これら英国留学生が帰朝後英国流の代表的紳士として各界に活躍し、重要な親英分子としてその影響力を及ぼすに至るのである。とりわけ、英国に対する関心が深くなるのは、学制上から英語必修の規則が大学殆んどすべてに通ずる慣行となり、慶應義塾の如く英学尊重の学校が多かつたのみならず、東京帝国大学に於いても、その半数は英語専修学生であつた。帝大の所在地が開成所本署、一橋門外の英国公使館跡であつたことは象徴的であるが、更に法学部に関する限り、東大は我が国法学教育における英法系の源流であり、英法系学校の嚆矢であることは周知のところであつて、設立当時の教授三名の中で井上良一を除くほかは英国人であつた。学課の配当時間の如き英法九時間に対し仏法三時間という割合は、当時いかに英語が重んぜられていたかを示すであろう。外国人教師も英国人八名に対し仏独人は各四名宛の半数であつた。[24] 当時大学程度の学校は、外国人でなくては授業することが出来ず、東京開成学校、予備門を通じていずれも教場では英語を使用し、英語で問いもし答えもしたのである。[25] 慶應義塾は外人教師をドロッパース、ヴィッカースをはじめ多く米国から迎えたけれども、その基本学風は英国流自由主義であつて、義塾法律科も英法だけが必修として各学年に配当されていたのである。[26] 東京帝国大学は、医学部を除けば、英国との関係が特に

深かつた。[27] 単に大学からの留学のみならず、政治、法律、経済、財政金融、科学、工学にとどまらず、陸海軍の組織、戦術、軍備などについて各方面から英国に留学生が送られたのである。その一例をあげるならば、日本銀行初代総裁吉原重俊は、英米留学の後、総裁現職のままで再び英国を訪れているが、後年日銀総裁として名をなした土方久徴、井上準之助なども東大卒業後日銀入行と共に英国に留学している。殊に井上は、明治初年政府顧問として我が国の銀行制度育成のため努力したA・アーラン・シャンドがバーズ銀行支配人であつた関係から、二年間バーズ銀行に見習として勤務したことに見られるように、実業界の指導的地位に立つに至つた者の多くが英国に学んだことは、英国の影響力を愈々強くしたのである。事実財政金融制度も、日本は「英吉利の銀行制度の真似」[28]をしていたのである。

いうまでもなく、日本資本主義の発達の上に果した英国の役割が異常に大きかつたことは我が国の近代経済史を繙けば明らかになるであろう。幕末貿易における英国の占める地位は、開国以来終始圧倒的優位に立ち、貿易総額の過半を占め、一八六五年には八五%以上に達している。近代産業の確立に於いても、日本経済にながく中心的存在であつた紡績業の発達は、英国から機械を輸入し技師を招聘したのに端を発するのであつて、明治政府の直営工場が英国から二千錘紡績機二基を輸入したのに始まり、民間事業として大阪紡績会社が設立されるや、英国留学中の山辺丈夫に機械学を学ばせ、帰朝後紡機、汽機、汽灌など殆んどすべて英国に発注した[29]のは、その一例にすぎない。紡績業などの軽工業が、マンチェスターなどから機械を輸入し、技師を招聘したのと同様、重工業もまた英国から援助を受けること多く、軍需工場も日本製鋼所の如く、英国アームストロング、ヴィッカース両兵器会社との提携により、海軍の援助を受けて専ら兵器の製造にたずさわつたが、機械類原料鉄はすべて英国から輸入したのである。[30] また海運造船の発展において英国の影響は非常なものであつて、明治時代日本海運は、殆んど英国に師事して居り、船舶運航、保険運営など全く英国に依存模倣していたのである。親英主義の筆頭たる加藤高明が日本郵船に入つていたことも興味ある事実であつて、海運要員は殆んど英国に学んだのであつた。[31]

これら海運造船との関係において、更に注目すべきことは、軍事兵制において、我が海軍が英国式を採用したことである。陸軍は、幕府が洋式軍隊訓練においてフランス式を採用し、ひきつづきプロシアに範を求め、メッケルを招いてドイツの流れを汲むに至つたが、それにも拘らず、横浜に英国は陸海千名に上る駐兵を行つていた影響力は無視すべからざるものがあり、殊に長く英国は語学将校を日本に送つて、後年のピゴット少将の如き親日軍人があつたことは、表面には現れない親英主義が陸軍にも存在したことを示している。[32] しかしながら、我が国で親英主義の旗手は、何といつても海軍であつた。我が国の海軍は、陸軍と異り、その創成当初から全くヨーロッパからの移入した制度に基いて発展した。海軍兵学寮は、明治二年創立の海軍操練所に端を発するが、幕府による海軍伝習所が、長崎にオランダの海軍士官を招聘して欧式海軍術を伝習せしめたのに対し、明治新政府は英国海軍の制を採用したのである。すなわち、政府は英国海軍の優秀にして規律厳正なるを知つて、英国海軍士官を招聘せんとして、英国政府に人物の選択を依託した結果、英国海軍省は明治六年海軍少佐ドウグラス以下三十四人に対し三ヵ年の期間で、日本海軍学校教師として奉職すべきことを命じた。かくて、六年七月来着したドウグラス以下の一行は、海軍兵学寮の構内に居住して教授、訓練に関する一切の責任を負うことになつたのである。[33] 英人教師は、測量術・航海術・機関運用・砲術・造船等の諸学科を教授し、授業には英語を主とし、教科書もすべて英書を用いたのである。しかも、これら三十四人の多数が、海軍生徒百十人の寄宿した兵学寮の築地の小地域に居住したのであるから、行住座臥すべて英国の風俗習慣になずみ、思想上にも大きな感化を受けたのは当然である。開校当時の生徒は、英国風の良風美俗を感受し、英国人の気象を呑みこみ、優れた紀律学術を受入れたのであつて、彼等は世界第一の海軍国たる英国のネルソンをその理想像（シムボル）とし、吾々はアドミラルの卵であるとは当時生徒一同の抱負理想であつた。このような雰囲気の中に生活した若き俊秀は、自ら英国流の紳士風たらしめる教養を身につけたのである。[34]

かくて海軍の育ての親は英国であることは自他共に許すところとなつて、日本海軍が伝統的に親英主義であつたのは全く

自然の成行であつた。その濫觴とも見られるべき証左の一つをあげてみれば、明治八年明治天皇が海軍兵学寮に行幸の際、麻布海軍教授の行つた御前講演、「ネルソンの略伝とトラファルガーの海戦」の中に、日本海軍の英国を敬愛する真情あふれるのを見出すであろう。その結びには、「臣武平謹みて惟みるに、皇国土地の形勢、人民の勇壮、殆んど英国に類似せるを以て、世に東洋英国の称あり。加之英国の教師を招き汎く海軍の規律及び技術を講習せしめ給へり。臣武平以為く、従来我海軍中水師提督ネルソン氏の如き英雄の士輩出して大いに海軍を拡張し、東洋英国の名に背かず、英国と併立して数百の艦舶を万国に派出し、紅旭の旗章を海外に閃めかし、皇国の威武を地球上に輝かさんこと期して待つべきなり」とある。

海軍からの外国留学生も、英国行が最も多く、明治四年十一名の外国留学を命ぜられた者の中、七名が英国、四名が米国であつた。全く創成期のわが海軍は英国一色にぬりつぶされていたといつて差支えない。例えば、訓練規律も英国式であつたのみならず、祝祭日までも、海軍兵学寮規則（明治六年）によれば、休業については、一、天長節に次いで、英国女王誕辰日をあげ、土、日のほか耶蘇更正祭（御復活祭）として毎年四月中の一週日に休みをとらせているのも、すべて英国式である。[35] この兵学校が出来る以前すでに、西洋式海軍を志して英国留学の途に上つたのが東郷平八郎である。

兵部省は明治二年九月海軍操練所を創立して海軍将校の養成に着手し、次で三年九月には英国海軍大尉ホースを聘し、横浜に碇泊する龍驤艦に各艦の将兵を集め砲術を練習しつつあつたとき、見習士官としてそこに在つた東郷は英国留学を熱望し、四年二月英国へ派遣されたのである。[36] 兵部省は、英国公館を通じてこの海軍留学生を英国海軍兵学校（ロイヤル・ネイバル・カレッジ）に入校せしめんとしたが、定員満てる故を以て許可されず、テームズ航海専門学校（ノーティカル・トレイニング・カレッヂ）に入り、ウースター（Worcester）号に乗組み二年間をすごし、更にハンプシャア（Hampshire）号にて遠洋航海を終つてのち、ケムブリッヂに於いて専ら数学を修めてから、グリニッチに建造中の扶桑の建造監督を行い、八年ぶりに帰朝したのである。[37] この七年の留学を終えた東郷士官が、英国の威光に打たれてヴィクトリア号上の英艦隊ネルソン提督を夢みて、新進気鋭の洋行体験を身につけ、海軍に親英否拝英の気風を

植えつけたことは想像に難くないであろう。したがつて、東郷元帥の戦法も英国式のものであつて、日本海海戦の勝利は、英国方式の勝利にほかならないといわれたのも故なしとしないのである。事実彼の主なる功績をよく研究してみると、その間にネルソン戦術の適用されていることが見出されるのである。[38] 日本海海戦で嘖々たる勝利を収め、アドミラル・トーゴーの名声世界に轟く中に、錦を飾つて英国に渡つた明治四十四年、依仁親王殿下渡英に随行してロンドンに至つた際、元帥が「余の第二の故郷たる英国」という言葉で、旧師をなつかしみ、またそのスミス大佐及び同夫人の肖像は、「ウースター」号の写真と共に、東京における書斎を飾り、これを宝物の中に数えている旨を英語演説していることは、いかに外交辞令であるにせよ、彼の胸中深く英国の印象が刻まれているのを示している。彼の脳中には、確かに英国の大人物ネルソンの精神がそのまま宿つているかに思われる。彼は戦後、連合艦隊司令長官として連合艦隊解散式の訓練（明治三十八年十二月二十一日）に於いても、英国に言及し、「ナイル及びトラファルガー等に勝ちたる英国海軍は、祖国を泰山の安きに置きたるのみならず、爾来後進相襲て能其武力を保有し、世運の進歩に後れざりしかば今に至る迄永く其の国利を擁護し国権を伸張するを得たり」と言つて[39]いることからも、いかに東郷が英国を強く意識していたかを証明するものであろう。

(24) 帝国大学五十年史　五八九頁
(25) 三宅雪嶺　大学今昔譚　二四頁
(26) 慶應義塾百年史　法学部史　四〇頁
(27) ラムゼイ・マクドナルドは、「われわれは日本の国力と日本に対する世界の尊敬に寄与するところ多かつた。帝国大学のような大教育機関の設立に当つて、日本ときわめて特異な、そして緊密な協力をおこなつた」といつている（ビゴット前掲書　中巻一二八頁）。
(28) 井上準之助論叢二　一七四頁
(29) 東洋紡績七十年史　二三頁、土屋喬雄・岡崎三郎　日本資本主義発達史概説　一五八頁
(30) 楫西光速　日本資本主義発達史　一四四頁
(31) 例えば外国人船員数は、殆んど主要部員は英国人であつて、明治十九年当時日本人船長三七名に対し、英人船長二六名を数えている。日本

郵船五十年史　七五〇頁
(32) ピゴット　前掲書　上巻　四二頁
(33) 伊藤正徳　大海軍を想う　一五頁
(34) 子爵斎藤実伝　第一巻　一四七頁一六五頁
(35) 海軍兵学校沿革史　第一巻　一四三頁　附録三二頁
(36) 東郷平八郎全集　第一巻　六六頁
(37) Georges Blond; Admiral Togo, 1961, p. 57.
(38) 東郷平八郎全集　第三巻　一二〇頁
(39) 前掲　第一巻　五二頁

五　日英同盟の背景

日英関係は、以上のようにその緊密化の地盤が着々築かれていたのであるが、条約改正に当つて久しく特権を放棄することを拒み続けていた英国が日本の治外法権撤廃に同意した最初の国になつたことは、単に我が国に親英感情を高めたばかりでなく、極東における西欧諸国の中で英国の主導的地位を確立したのである。一八九〇年までの十年間存在した欧米崇拝時代の反動が訪れた、十九世紀の最後の期間における英国の威信と声望は、断然他の諸国を凌駕するに至つた。とりわけ、日清戦争において英国が局外者の地位に立ち、かの遼東半島還付の勧告に英国が加わらなかつたことによつて、愈々英国の日本における人気は高まることになつた。三国干渉以来、ロシアとドイツはすでに日本の潜在敵国となり、殊にロシアは直接の仮想敵国と見做されるに至つた。日清戦争以後、また義和団事変において軍事的実力と節度を認められた日本は、英国によつて高く評価され、その結果、日英同盟が結ばれることになつたのである。この日英同盟に結実を見た我が国に於ける親英主義は、英国そのものに対する親近友好の情理に根ざすところがあるのは勿論であるが、しかし外交上からみるとき、そ

れは恐露又は反露主義の裏返しとして発展してきたことも認めなければならない。幕末維新当時の我が国当局者に強い影響を与えた英国公使パークスが、対外政策としてロシアの南下侵略の危険を烈しく主張[40]し、それが対露警戒論を喚起させる大きな契機となつたことは看過出来ないところである。

この背景において最初の日英同盟の提唱者として福沢先生の言説は、当時の朝野に非常な影響力をもつたのである。例えば、その「日本と英国との同盟」という論説において、「欧州諸国は相互の関係頗る込入つて陰陽表裏権衡軽重定らず、内輪の安全をはかるために欧州以外の交際を犠牲とし、アジア諸国に対し朝友暮敵常なく恃むに足らざるに、独り英国は大陸列国の紛争に関らず、常に物外に超然として自から守るのみならず、其海上の勢力は他国の遠く及ばざる所なれば、今日の場合に於て日本の為に同盟国を求めるときは、先づ指を英国に屈せざるを得ず。東亜西欧の両島国が両々相結んで遙に相応ずるは形勢の命ずる所なれども、人或は云はん、日英の同盟、妙は則ち妙なれども、自利の為に動くは今の立国の主義にして、此事たる、果して英の為めに利なれば招かざるも彼れより来りて求る所あるべし、若しも然らざるに於ては仮令ひ日本国が熱心するも彼れは唯冷然たる可きのみと。或人の言、誠に然り。我輩素より文明立国の自制主義を知らざるに非ず。唯これを知るが故に英人の必ず我れに応ぜんことを信ずるものなり。其次第を語らんに、抑も英人が自国の利益を衛る為めに第一の目的とする所のものは、露国の南進を防ぎ彼をして海浜に頭角を現はすこと勿らしむるの一事にして、多年来英国の外交政略と云へば殆んど此の一事の外に見る所なしと称するも過言にあらず。……扨て露国が亜細亜の東辺に跋扈するは、英国人の利益を妨げ感情を害して到底黙許すること能はざると同時に、日本の利益にもあらざれば、今日の我国情に於て苟も露国をして満州若しくば朝鮮の地方に不凍港を得ることなからしむる為めとあれば、国力の許す限り如何なる画策運動も敢て辞せざる可し。是即ち日本国と英国と期せずして利害を共にし、目的を同ふし又同情相感ずる所の一点なるが故に、期せずして成る可き両国の同盟は所謂天然真乎の同盟にして、其堅固なることは普通紙上の空約に勝ること万々たり。斯の如

き同盟にして愈々実際に成立して、緩急相応じ海陸相援ることゝもならんには、両国の為めに非常の利益なるは云ふまでもなく、而して其利益に浴する深浅厚薄に至ては英国と日本と異る所ある可らず。……英国が是れまで同盟を離れたる所以のものは、敢て他国と同盟する其事を避け嫌ふたるに非ず、唯露国南進の防禦に就き、世界の強国中、英と利害を同ふする者なきを以て、已むを得ず孤立したるのみ。若しも等しく利害を感じて実力を以て相与に共同の敵に当らんと云う者あらば、機敏なる倫敦の政府は之を歓迎して、其力を借ることに躊躇せざるや疑を容れず。現に英国は露西亜を防ぐ為めに、支那の如き土児格の如き腐敗国すら味方にして之を保護したるに非ずや。況んや日本に於てをや。我輩をして強ひて云はしむれば、日英同盟に由て利益を享ることの多き者は、日本よりも寧ろ英国なりと断言するを憚らざる者なり。(41)」と説かれている。

しかしながら、この論旨を以て日英同盟を主張された先生は、ただ漫然と日英同盟を礼讃する向きに対しては、頗る冷厳な批判を下されていることを注目しなければならない。例えば、明治三十年、先生は、「日英同盟の説に就て」という論説に於いては、有栖川宮の英国女皇即位六十年の祝典に参列された際、英国から大歓迎を受け、伊藤博文がソールズベリー首相と対談が打とけたことから、漫りに想像して日英同盟の黙約が成立したかの如き妄想を抱くのは「非常の了簡違ひと云はざるを得ず、単に大使の歓迎、政治家の対談を見て両国の間に同盟の成立を云々するが如きは、恰も小児の見解にして世間の物笑にこそあれ」と一蹴されている。「今、英国と日本とは素より商売敵を以て見る可らず、真実紛れもなき親友国なれども、左ればとて一国には自ら一国の利害ありて、其利害は一毫も他の為めに枉ぐ可らず。或は彼の近来の地位を目して孤立など云ふものなきに非ざれども、其孤立とは一国自ら支へて他に頼らざるの謂のみ。実際は純然たる独立の実を表するものにして、蓋し英人の考を以てすれば、英の国力は独力以て世界に立つに差支なしと信じて、事の有無ともに他を頼るの必要を感ぜざるものならん。他の各国が彼を嫉視するにも拘らず、其聯合の力を以て尚ほ一指を加ふる能はざるこそ明白の証拠にして英人の所謂光輝ある孤立とは決して誇大の言に非ざるを知るべきなり。思ふに今の国交際は義理もなく人情もな

く、況して自ら損して他の為めにするが如き義侠心などは一点も見る可らず。世界一般の常態なる中にも殊に英人の如きは本来の性質として自重固く持して容易に動かず、眼中唯自家の利害あるのみにして他の痛痒を知らず、其一段に至りては冷淡殆んど水の如くにして一切万事自国自利の数より割出すの風なれば、自利の為に一毫も利益なき他国に関係して事を共にするが如き其国質に於て断じて為さざる所なり。左れば百の有栖川宮千の伊藤をして使せしむるも、他の一片の好意に応じて自利以外に攻守同盟を結ぶが如き英人に限りて万々望む可らず、明白の事実にこそあれば、我国人たるものは単に礼遇の一事を認めて苟も心を動かす可らざるものなり。我国今日の対外に利益の同うするものを求めて同盟の約を結ぶは固より望む所なれども、同盟は相互の利益を旨とするものにして詰り交易の主義に外ならざれば、苟も我国にして他の同盟を求めんとならば、先づ自から富強の実を成して自から同盟の為めに利すると同時に、又他をして之が為めに益せしむるの要素を備へざる可らず。喩へば国の同盟は男女の結婚と同様にして、処女たるものにして望む所の良人に帰せんとならば、自ら相当の資格を造らざる可らず。同盟の嫁具は即ち富強の実にして、其実にして備はるを得ば自から求めざるも他より結婚を申込むものある可し。其相手は英国なり……如何せん目下我国の実際を見れば、国内の百事今正に整理の最中にしていよいよ富強の実を成すは前途尚ほ遠きことなれば、其対手は孰れにしても目下の縁談は先づ以て覚束なかるべし。我輩は他の同盟の香ばしきを知らざるに非ずと雖も、軽率に進んで之を求めず、唯退て自から勉め自から同盟の地を造りて他の来るを待たん[42]と」されたのである。

このような議論と共に、実際の政治家の動きも顕著となつて来たのであつて、日英両国の接近を促したのは、伊藤、山県等の日露提携論者の動きが、英国側に伝わり、それが少なからず英国の神経を刺激したものと思われる。とりわけ、北清事変に於いて我が実力を眼前に目撃した英国の当局者の中には、極東に於いてロシアの兵力に対抗出来るものは日本を措いて他にないという感が高まつて来た際であつたので、自然英国も日英提携のことを真剣に考えるに至つたのである。[43] この英国

側の論調が、我が国にとつて頗る好感を以て迎えられたのは当然である。例えば、日本条約改正論に於ける倫敦タイムス新聞社説の如きは、我が国の地歩を十分評価して、日本に対する同情を示し、条約改正を決行すべきことを論じたことは、愈々親英論者を力づけたわけである。それは恰かも我が国の立場を代弁するかの如き論旨であつて、次の如くに述べている。

「況ンヤ土地富饒ニシテ人衆三千五百万ヲ有シ、欧州開明ノ福利ヲ確信シテ駸々日進ノ勢ヲ極ムル一大帝国ノ嚮背ニ関スル一大重件ヲ処スルニ臨ミ、我英国ニ在テハ最モ公平ヲ主持シテ其間毫末ノ私心ヲ挾マズ、飽マデ彼ニ向テ我高誼ヲ尽サヾルベカラザルモノアルニ於テオヤ。」……「誠ニ之ヲ約言セバ、日本ハ恰モ欧洲各国ト土耳古帝国トノ間ニ成立スル如キ条約ノ羈絆ヲ受クルカ故ニ、日本ハ此条約ノ羈絆ヲ脱シテ列国交渉上ニ於テ一国タルノ地位面目ヲ回復センコトヲ熱望シテ止マザルナリ。我通信者ノ云フ所ニ依レバ、日本ノ相手タル締約国ノ数ハ十有七国ノ多キニ在ルヲ以テ、悉ク之カ承諾ヲ為サシメントスルハ到底得テ望ムベカラズ。是ヲ以テ我英国ハ断然此数国ノ聯合ヲ脱シ、自ラ独歩ノ地位ヲ占メザルベカラズト主張セリ。抑モ日本条約タル、今ヲ去ル二十五年前日本変乱ノ時ニ乗ジ、圧抑強迫シテ幾ンド腕力ニ依リ締結シタル所ノモノナリ。……我英国ハ日本開明ノ先達ナリ、我英国ハ商業ノ多分ヲ東洋ニ占ムルノ領袖ナリ。随テ我英国ハ其先達及領袖タルノ権理義務ヲ有セザルベカラズ。故ニ我英国ハ日本ト諸外国トノ間ニ介在シテ事ヲ調理シ、諸外国ヲシテ日本ノ正当ナル要求ヲ容レシムルハ実ニ我義務ト云フベキナリ。不幸ニシテ事水泡ニ属シ、我在日本英国公使ノ言諸外国公使ヲ服スルニ足ラザレバ、則チ同盟ヲ脱シテ我レハ我ガ道ヲ行ヒ、二十五年ノ久シキ日本ヨリ領収シタル質物ヲ日本ニ返付センノミ。……我英国公使ノ言行ハレズシテ諸外国ノ同盟ヨリ脱シ、卒先シテ日本ノ渇望ヲ潤スニ至ラバ、我ニ二個ノ利アリ。一ハ我英国ハ日本ノ希望ニ副ヒ、日本ノ為ニ洪益アル変革ヲ成功シタルノ先達ナルヲ以テ、其功績実ニ鮮シトセズ。猶又我英国ハ日本国民ヲシテ、我ヲ其親密ナル朋友ノ一ニ加ヘシムルヲ以テ、我商業上及政治上得ル所亦鮮シトセズ。此事実タル苟モ軽忽ニ看過スベカラズ。況ンヤ東洋政治上風潮ノ方針如何ヲ詳ニスル者ハ、日本政治家ノ胸裏ヲ推測シテ日本ハ露ニ頼ラン歟、将タ英

ニ倚ラン歟、二者ニ就テ其嚮背ヲ択ムノ大計ヲ籌算スル所アルベキ時運ニ達シタルヲ了知スルナラン。何ヲ以テ之ヲ謂フ。今ヤ英ハ東方ニ巨文島ヲ控ヘ、露モ亦東方ニ浦塩斯徳ヲ擁シ、互ニ対峙シテ威ヲ此ニ振フ。……露国ノ竊カニ支那及日本ヲ窺フハ世人ノ普ク認知スル所ナリ。故ニ我英国ハ今日進デ日本ヲ庇護シ、日本ヲシテ露国ヨリ一層ノ親国タルニ至ラシムルハ蓋シ亦無益ノ業ニアラズ。日本モ亦蓋シ之ヲ望ムベキナリ。素ヨリ日本人ハ英国ヲ慕ヒ、英語ヲ学ビ、務メテ之ニ倣ハント欲シ、以テ開明ノ師ト仰グモノナリ。或ル日本人ハ説ヲ為シテ曰ク、若我日本外国ノ羈絆ヲ免ガルヽ事能ハザレバ、寧ロ英ノ羈絆ヲ受ケンコトヲ欲ス。英国ニシテ其羈絆ヲ解ク最モ欲スル所ナリト。日本政治家ハ方今英清両国ノ間ニ存スル交渉ノ傾向ヲ見テ大ニ之ヲ賛成シ、其最モ親密且ツ近接スル清国ガ西洋諸国中最モ親愛スル英国ト協同シテ事ヲ処セントスルヲ悦ビ、且ツ進デ我英国ト北京政府トノ間ニ締結シタル盟約ニ与カルヲ希望スルモノヽ如シ。」(44)

このような状況において、日英両国は接近し、遂に日英同盟締結は実を結ぶのであるが、ここに親英主義者の先見を賞する前に、その締結の意義を考えてみなければならない。それは、ロシアの南進に対して日英両国が同一の関係に立つて、利害一致した両国が共同歩調をとつたのは必然的であつたが、英国から見れば、東亜における権益擁護の重要任務を日本の肩にかけたのである。すなわち、日本は英国の生命線の守本尊、或は極東における英国の番犬（ウオッチ・ドッグ）という役目を課せられたのである。しかしながら、純真な日本は、この同盟条約に限りない満足を覚えたのであつた。換言すれば、この条約の文字条文以上に、世界最強の文明国たる英国と対等の同盟条約を締結したことに、何よりの精神的満足があつたのであり、そこに日本人の国家的名誉心の誇りがあつたのである。(45) いわば、日本が東洋の一国でありながら、他の諸国とちがつて西欧先進国と同盟してその仲間入りしたことは、いわゆる脱亜入欧の念願を達成したという満足感をみたし、清韓など東亜諸国を蔑視するという高姿勢をとらしめることになつたのである。それにも拘らず、同盟の実体を探るならば、日英同盟は、世界第一の帝国たりし英国と対等の条約を結んだという自負自尊心、或いは対露強硬の自主性を主張した日本の相対的独立の表明で

あるかの如く見えるけれども、実は英国世界戦略の一環に日本がくみ入れられたことにほかならない。それは表面的には、大英帝国と平等な立場に立つた形をとつているが、本質的には清国に代つて登用された英国の極東代理人となつたこと、いいかえるならば、大英帝国の系列会社の中に身を投じ、自ら子会社としての従属性を承認したことになるのである。しかも親英主義は、日英同盟に力を得て恰かも虎の威を借る狐の如く、清韓に対して帝国主義的態度をとるに至り、日英同盟によつて韓国にフリー・ハンドを許された日本は、愈々積極的に大陸進出を開始することになる。親英主義は、日本が英国の模範生であることを以て自任したものであるが、それはまた英帝国主義の追従模倣するという忌むべき側面をもつていたことも看過すべきではないのである。

(40) 日本外交文書　明治時代　追補　第一冊　一七頁・一九頁
(41) 明治二十八年六月二十一日附　時事新報社説
(42) 明治三十年八月一日附　時事新報社説
(43) 信夫淳平　明治秘話二大外交の真相　二二頁
(44) 伊藤博文秘書類纂上巻　五七〇頁以下
(45) 外務省情報部編　イギリス読本　昭和十一年　六六頁

六　親英主義促進の要素

英国が三国干渉に与するのを拒絶したことは、我が国に著しい好感を与え、ここに日英接近は愈々進捗して遂に日英同盟が結ばれるのであるが、その間において対露関係の進展状況を顧みなければならない。周知の如く、伊藤・井上の日露協調派の勢力は、依然として抜き難いものがあり、その満韓交換論は栗野駐露公使によつて端緒がつけられんとしていたとき、小村外相はロシアとの協調の線を打切り、日露接近を斥けたのである。[46] それは親英路線を決定的なものにしたと同時に、日露対立を致命的なものとし、日露戦争を招来することになつたのである。当時、日本外交の進路には二つの選択があり、一

はロシアと戦わずに妥協せんとする流れと、他はロシアと一戦を覚悟するもの、即ちロシアに対して強国の後援をたのむ日英同盟推進派とがあつたのであるが、その前者を抑え後者を採つたことについては、宮廷外交のイムパクトを見逃すことが出来ない。すなわち、明治天皇は、英国が倒幕に尽力したという理由のほかに、明治二年最初の外国王族来朝たるエディンバラ公の来日を迎接されて以来、英国に対する親近感をつよく抱かれ、其後コンノート殿下の来日もあつて、日英両王室の親交がつよめられていたのであつた。このような宮廷間の親交があり、英国に対する信頼感がつよかつた明治天皇は、日英同盟の締結に当つて賛否両論対立しているとき、「聖断一下」、ここに締結の運びとなつたのである。(47)

日英同盟という確固たるコーナー・ストーンがうちすえられてからの日英関係は、順風に帆をあげて進展した。日英同盟は、英国にとつて対露対抗戦略において日本の演ずる役割、すなわち、ロシアに対する代理戦争の担手としての日本を予想するものであつたから、英国の日本に対する支援が着々行われたのはいうまでもないところであつた。臥薪嘗胆下の日本の軍備拡張はめざましいものがあり、殊に海軍費の大膨脹は、英国に対する軍艦発注となつて現れた。

元来海軍と関連して、英国との関係において重要なことは、軍艦建造と海運輸送であるが、この二つとも英国に負うところ多かつたのはいうまでもない。日本海軍省は大艦輸入、小艦国産主義をとつていたが、その大艦の殆んどは英国の造船会社に発注され、かの軍艦「三笠」も英国ヴィッカース会社に注文されたものであつた。日清、日露両戦争の中心戦力となつた主要軍艦が英国建造にかかるのみならず、その日本への回航に当つて英国の示した好意は、海軍のみならず国民あげて感謝するところであつた。日清戦争の花形「吉野」もアームストロング造船所で建造されたものであつた。日清戦争に備えて戦艦「富士」「八島」も英国に注文されたものであるが、とりわけ、日露戦争に備えて日露の軍艦購入競争において、英国軍艦を出動させて迄回航の安全をはかつたことは銘記すべきである。英国で建造中のチリー戦艦一万二千トン級二隻が、ロシアの巧みな商談に乗つて売却寸前に迫つていることを知るや、同盟国英国は直ちに即金で買入れたのみならず、アルゼンチ

ンがイタリアで建造中のモノレ級二隻の購入を示唆応援して、その結果とし、明治三十六年十二月三十日日本の手に落ちた。[48] この二隻即ち「日進」「春日」の二新鋭艦の回航は、英国の手によつて行われ、しかも地中海の英軍港マルタを過ぎると、英重巡キング・アルフレッド号が出動して露国艦隊に対する示威を行い、英海軍は実力を以て日本軍艦を保護したのである。更にスエズ運河通過にも艀は全部日本に予約されているというので露国艦隊は後廻しにされ、合法的援助を与えられて、「日進」「春日」は横須賀に安着したのであつた。[49] のみならず、日清戦争はいうまでもなく、日露戦争に於いても、戦争遂行上必要な御用船は、本邦船会社の到底賄いうるところでなかつたので、この御用船不足に当り、政府は日本郵船会社に命じて外船購入を行わしめたが、その殆んどが英国から購入されたものであつたのである。いうまでもなく、日清・日露戦役当時のわが買船傭船は殆んど英国籍或いは英国系船主のものであつて、当時それだけの船舶の余裕をもつているのは英国だけであつた以上、それは当然であつた。[50] なお当時大型船の外国に注文されるものが多く、これについては、西南の役に功著しかつたブラウンが帰英後設立したA・B・ブラウン・マックファーレン会社が、其後長期にわたり英国で建造される大多数の軍艦商船の建造契約を引受けたのである。[51]

日露戦争の遂行に当つては、英国は同盟国として陰に陽に盟邦援助の手を差のべたが、その注目すべきものとしていわゆるハーディング報告[52]があつたのを忘れるべきではない。例えば駐露英国大使館からオデッサ駐在領事に対する黒海艦隊出動を牽制させる訓令などは、戦略的に日本を有利に導かんとする好意を明示している。すなわち英国政府は、黒海艦隊とバルティック艦隊とが連合して東航することの日本海軍に対する危険を憂慮し、黒海艦隊の海峡通過を英国に対する挑戦とみなすという態度を示したのであつて、干戈に訴えてまで黒海艦隊の東航を阻止した英国の日本応援は我が国の感謝おく能わざるところであつた。[53] 経済的にも日露戦争の戦費はその七八%という大部分が公債で賄われ、その中の過半数八千二百万ポンドに上る外債が募集されたのであつて、英米における外債の成立なくしては戦争の遂行が不可能であつたのである。[54]

戦争遂行と直接関係はないけれども、英国が友邦国として我が国に重要な支援を与えてくれたのは、ポーツマスの講和において、英国の外交的配慮が殆んど放棄しかけていた領土要求、すなわち樺太の南半を獲得することを可能にしたという事実である。周知の如く、ポーツマス講和談判に於いては、ロシアは極めて高姿勢であつて、我が方に頑強に譲歩せず、会議は難航をきわめていたのである。兵站線が延び切つて戦争続行の困難な状況の下にあつて、日本は遂に償金も割地もすべて放棄して局を結ぶという事態にまでなつたとき、英国の駐露大使がロシア皇帝の樺太南半は譲るならば考えてみる余地ありとの情報を摑み、これを在日マクドナルド大使に転電して来たのである。この貴重な報告を受けた石井菊次郎局長が大本営にかけつけて検討の結果、最後に講和最終会議を後らせて、小村全権に再交渉せしめ、「樺太南半を拾つた」のであつた。[55] 若しこのマクドナルド情報がなかつたならば、日本は樺太の南半を獲得出来なかつたであろう。露皇帝がマイヤー米国大使にこれをもらしたに拘らず、ルーズベルトはこれを伏せて日本に伝えなかつた。然るに英国の好意によつて日本は最後に救われたわけであるから、わが当局者は自ら英国に感謝し、親英感情が盛り上つたのは当然であろう。小村全権が帰国するや、桂・ハリマン協定を破棄したのも、ルーズベルトの酷薄な不信行為に対する反撥と、これに対して英国の好意に酬いんとする彼の意図に出たものと解することが出来る。満鉄建設には厖大な資金が要るに拘らず、何故米国の資本導入を拒否したのかと問うならば、それは以上の背景を顧みるとき、満州関発に対する英米資本の対立の間において、日本が英国に与し、英国に対する厚意に酬いたと見られるのである。事実満鉄社債はロンドンで発行されたのであつて、戦争で手に入れた満州の経営は外資の援助なくして行われ得なかつたのである。[56]

日露戦争の結果、日英同盟は強化され、明治天皇はガーター勲章を贈進され、ロンドンと東京の公使館は大使館に昇格した。駐英大使には小村、加藤高明と相次いで親英主義者の代表選手が送られた。殊に加藤は超親英主義であつて、「帝国政府は日英同盟を以て帝国外交の骨子となし、常に此主義を厳守して渝らざる方針」であることを勅語をたてにして宣明した

のである。加藤において特徴的なことは、彼が対内高姿勢に徹し、元老の容喙を排斥し、軍部の干渉を拒否しながら、英国に対しては全く一辺倒であつたことである。彼は「英国の外務大臣」と渾名されたほど、英国心酔の標本ともいうべき存在であつた。関税自主権恢復の外交について、政府が協定税率金全廃を訓令したのに対して、加藤は英国はどうしても譲らぬと信じて英国に対して一部の協定税保存もやむをえずとし、恰も加藤対小村の外交戦の観を呈した。[57] 中国に関するすべての問題に関して、日本は先ず英国と打合せ協力して当らねばならないとは、小村、内田両外相に加藤が権利の如く主張したところであつた。加藤がグレー英外相から旅大租借期間延長の諒解をとりつけたことは、後年彼が外相として、対支二十一ヵ条要求提出の根拠となつたのであり、この英国からの諒解なくしては、対支強硬外交を以て名高い加藤も交渉を切り出せなかつたであろう。第一次世界大戦に於いても、加藤は英国側の戦局限定の意向に拘らず、日英同盟を拡大解釈して、英国に加担して対独戦に突入したのである。戦時中、日本海軍は、地中海まで出動して、英国と共に船団護衛に当つて対英協力の実をあげた。

日本海軍もまた其後ながく親英主義の伝統をもちつづけ、その海軍航空隊を設置するに当り、英国海軍に範を求めた。[58] 大正十年世界戦争に参加したセンピル大佐以下三十名の飛行団を招聘し、霞ヶ浦及び横須賀に於いて諸種の航空技術を伝習せしめた。陸軍が航空技術をフランスのフォール大佐に求めたのと対照的に、海軍は日英同盟消滅以後まで親英主義をすてなかつたのである。センピル大佐は、英空軍の至宝であり、その配下の将校は第一次大戦に戦功のあつた優秀な指揮官であつた。彼は当時我が幼稚だつた飛行将校を我が児の如く教育した結果、我が飛行学生は一年半で高校卒業程度まで成長したのである。それまで飛ぶことだけが飛行将兵の目標であつたのに、戦うことにまで一変させたのがセンピル教育であつたのである。海軍における親英主義が明治以来連綿として続いていたのは故なしとしないのであつて、センピルの訓育は、海軍士官を悲憤慷慨せしめるほど江田島でも体験しなかつたという厳格なものであつたが、後に却てその品格が仰がれるようにな

つたという。[59]

(46) 子爵栗野慎一郎伝　二六九頁

(47) 外務省蔵版　小村外交史　上　二八三頁。なお清訳洌　日本外交史によれば、事聖断が下るについては、伊藤博文のベルリンからの電報は、「直ちに英国と提携するは頗る早計ではあるまいかと思う」という日英同盟反対論があり、桂と小村は参内して伊藤の電報を叡覧に供し、これに対し閣員の不同意と英国への回答の一日も猶予すべからざることを奏上したが、この主脳元老と閣議との意見衝突に対して、明治天皇は決裁を下された。同上書上巻二九五頁には「伊藤はさきに主義として日英同盟に賛成していたのではないか、今日に至り同盟締結を遅延することあるべからず」とある。

(48) アルゼンチンとロシアとの軍船買収交渉の事情を英国は日本に内々知らせてくれた。それは「英国が日本に対して同盟の好誼を示した」のである。堀口九万一「日進」、「春日」譲り受け秘話、世界の思い出　昭和十七年　二一頁。

(49) この回航に当つて如何に英国に依存したかは、山本海相の電訓に「寄港地は常に英国領地を選ぶべし。途中に於て危険なる状況に陥るの虞あらば最寄英国領港湾に入り何分の指揮を仰ぐべし」とあるによつても知られる（斎藤実伝　第一巻　九三三頁）。尚英国の好意的行動については、伊藤正徳　前掲書　一二八頁参照。

(50) 日清戦争中の御用船の数は、日本郵船五十七隻十三万総屯、大阪商船三十隻一万二千屯、社外船主五十三隻八万五千屯、合計百四十隻二十二万七千屯であるが、明治二十六年末千屯以上のもの六十四隻、三千屯以上のものは僅かに二隻にすぎなかつたから、急務事に足るべくもなく、この不足は外国船の購入によつて補われたのであつて、明治二十七、八の両年における外国船輸入は、七十三隻、十六万二千四百九十六屯に達したのである。逓信事業史　第七巻　九四六頁

日露戦争は、その規模の大なること日清戦争の比でなく、陸海軍共莫大な船腹を要したのである。戦時中御用船の最も多かつたときは、陸軍百七十七隻四十四万屯、海軍八十九隻二十三万屯、計二百六十六隻六十七万屯に達したのである。その筆頭は、日本郵船会社の五十五隻二十一万二千九百二十七屯であるが、これらはあげて軍用に供せられたのに、なお不足を告げる状態であつた。したがつて外国傭船も頗る多くなり、戦時中外国傭船の最も多いときは八十九隻十九万屯に達した。ここに夥しい外国船購入が起つたが、輸入船は合計百六十余隻約三十一万屯であつた。この購入傭船先が殆んど英国であつたのは自明である。同上書　第七巻　九五四頁、九五五頁、一〇九八頁

(51) ピゴット　前掲書　下巻　一七九頁

(52) 日本外交文書　日露戦争V　第五巻　一二四頁。「駐露英国大使「ハーディング」ヨリ英国外相宛極秘信内示ノ件」なる文面は、英国が戦時中日本に対していかに好意的態度を示したかを証明している。

(53) 同書　日露戦争　第一巻　一〇四九頁。明治三十九年四月六日　在オデッサ飯島領事発西園寺外相宛「日露戦争中黒海艦隊ノ動静監視方ニ

関シテ英国大使ガ当港駐在ノ同国総領事ニ与ヘタル訓令ニ関スル件」参照。

(54) 小村　外交史　上巻　四〇七頁。高橋是清自伝　六五七頁

(55) 幣原喜重郎　外交五十年　一八頁

(56) 石井菊次郎　外交余録　八二頁・八三頁。信夫清三郎　明治政治史　一四三頁。南満洲鉄道株式会社三十年略史　六六五頁

(57) 伊藤正徳「加藤高明」上巻六六八頁。加藤は、天皇から英国皇帝に親書を送るのが最良の方法として、明治四十五年四月十五日「加藤大使帰任ニ付御沙汰」として、「卿任ニ帰ラハ朕カ不変ナル敬愛ノ至情又英国皇帝陛下ニ致シ且日英両国間ニ存在スル良好親密ナル関係ヲ確保増進スルニ常ニ朕ノ念トスル所」なる勅語を捧持して渡英したのである。

(58) 伊豆公夫・松下芳男　日本軍事発達史　二九一頁

(59) 伊藤正徳　大海軍を想う　三三七頁

七　親英主義の退潮

日露戦争に勝利を占めた日本は、満州からロシア勢力を駆逐して、満州における優位を確保するに至つたが、それは日英関係に影響を及ぼすことになつた。元来、日英同盟もロシアの南下進出に対抗するために成立したものであつたから、日露戦争の結果、ロシアの脅威が除かれるに至れば、日英同盟の重要性が低下するのも自然といえよう。のみならず、三回にわたつて日露協約が結ばれて、日露関係が改良される事態になつたことは、相対的に日英関係を冷却することにならざるをえなかつたのである。すでに日露戦争の翌年、マクドナルド大使は、満州の門戸閉鎖の事実に関し注意を喚起する旨の申入れを行つているのであつて、日露戦争当時絶頂にあつた親交関係にひびが入つて来るのである。しかし、明治四十五年日英同盟は更新され、我が国における親英感情は依然著しく、ピゴット少将の語るところによれば、日本将校に、「天皇陛下が兄とされている大君主英国」王の将校として紹介されたほど、陸軍の中にも親英主義は深く滲透していたのである。しかし、第一次大戦を契機としてこの親英主義は、急激に熱が下るに至つたのである。(60)

「帝国外交の骨髄」[61]であつた日英同盟が、ワシントン会議で廃棄されたことは、我が国に異常な反響をよび起した。英国に於いては同盟が時代後れで不必要と考えられたのに対して、日本にとつては同盟の廃棄は侮辱であつた。それは日本にあつては、燃え上らんばかりの憤りとなつた。英国人は忘恩の徒であり、日本人の顔に泥をぬつたととり、たえ難い屈辱を受けたという風にとつたのである。[62]事実それまで、英国に対する日本の立場は、疑いもなく主家に忠実な番犬の役目であつた。ロシアの南下に対し英国の致命的利益を擁護するために、日露戦争という代理戦争の犠牲を払い、まことに献身的な努力を払つて来たのは日本であつた。かかる日本の純情と誠実に対して支払つた代価は、ワシントン会議における背信行為であつたと日本人は考えたのである。[63]英国に対する不信の念は高まつた。第一次世界大戦に於いて、日本海軍は英国と協力してインド洋、地中海にまで危険な任務を果したに拘らず、英国海軍は日本軍将兵を酷使し冷遇した。[64]この反響は、親英主義に徹した筈の海軍にすら、反英的な気風をつくることになつたのである。ワシントン会議における日英同盟の水葬は、日本軍部はいうまでもなく、日本国民にたえ難い痛憤をよび起し、英国に対する空気は冷却した。親日家ピゴット少将は、日本人の心理的影響について、バルフォアに次の如く語つたことは、失当ではない。「日本は同盟を永久の婚姻とみなしていたので、戦後こんなに早く、それを正当化する日本側の不信行為がないのに同盟を解消することは——事実これは離婚である——日本に対し、とり返しのつかない大きな侮辱を与えることになろう。のみならず、これは日本人が最悪の罪とする忘恩と解さるであろう。[65]」

しかしながら、根強い親英主義の流れは、日英同盟の消滅によつて容易に消え去りはしなかつたが、排外的軍国主義が抬頭すると共に、親英主義者はおしなべて舞台から退いて行つた。中国をめぐる日英の対立は昂じて、対英感情は悪化を辿るのみであつた。しかも、有力な識者の中には、親英主義者が時代の波に抗して根強い存在をつづけていたのである。例えば、日本外交界の重鎮として抽んでた松平恒雄元駐英大使の陸海駐在武官に対する忠言は、これを示して余りあるであろう。

「彼等（軍人）の強調するところは、興隆日本の前途に横たわる最大の障碍は英国である。日本は今こそ英米追随の外交を清算して満州事変の解決に断乎邁進すべきだ、と言うにある。彼等の言分は自分にもよくわかる。然しながら、日本として国策国防の焦点がソ連に向いている現在、英国を敵に廻すことは甚だしい冒険である。老大国とは言え英国自体の持つている偉大な底力、又世界政局上に有する英国の地位というものは、断じて軽視すべきではない。英国を敵視する必然の結果は、英米ソ支の提携となつて現れるであろう。満州事変を解決に導くためにはむしろ英国と協調しつつ、合同の力によつて支那を抑えて行くのが賢明ではないか。アジアに於ける日英争覇の運命は何よりも時の考慮が肝要である。決して焦るべきではない。殊に国歩困難な今日、国力を過信して急進主義をとるのは日本を危うくするものと自分は信じている。」(66)

(60) 日本外交年表並主要文書　上巻　二五八頁

(61) 「日英同盟ハ帝国外交ノ骨髄タリ」とは明治四一年九月二十五日閣議決定の対外政策方針の冒頭に出て来る言葉である。日本外交年表並主要文書　上　三〇五頁

(62) ピゴット　前掲書　下巻　一八六頁

(63) 池崎忠孝　日本最近対外政策論攷　昭和十四年　二三四頁

(64) 加藤寛治伝　第十五章は、伊吹艦長として英軍に協力するも英軍の奔命に暇なく、特にエムデン撃沈の功を英軍に譲らせられた「伊吹乗員の大失望」にふれているが、それは一例にすぎない。

(65) ピゴット　前掲書　中巻　一六頁

(66) 松平恒雄追想録　昭和三十六年　三三二・三三三頁

八　むすび

明治初年から今日に及ぶ日英交渉の歴史は、古きよき時代を経験したと共に、幻滅の悲哀を味い、不信と破局の暗黒時代を経て、現在再びきずなの復活を見た明るい時代を迎えている。今や日英関係は、明治時代とは全く異つた環境の下に相接

近しはじめ、「極東における英国」という言葉が屢々聞かれるようになつた。太平洋戦争は英米ところを変え、第二の開国に於ては、米国が第一の開国のときの英国に代つて登場し、日本の改革管理に指導的役割を果すことになつた。パークスの恫喝外交に代つて、マックアーサーの高圧的占領支配が日本を席巻した。かつて対露対抗上、日英両国は握手して日英同盟を結んだが、今日では反共陣営の立場において、日米両国は提携して日米安保体制をつくつている。ここに、一見図式的には、日英関係は日米関係に類似しているが、しかしながら、日英同盟と日米安保体制とは、その伝統において時代的背景において著しく異つているのを認めざるをえない。現在、日英接近の気運が高まりつつあるのは、勢力均衡上の結合ではなく、新しい共通条件が熟しているからである。今日では、日英同盟時代厳存した実質的な不均衡は両国間に存在していない。明治時代の日本は、世界第一の強国英国に到底及ぶべくもない新参であつて、同盟関係に於いても実はジュニア・パートナーにすぎなかつた。しかしながら、爾来半世紀をすぎて、英国は、植民地を失つて帝国主義国としては没落変貌しつつあり、日本もまた帝国主義国としては自滅して、軍国主義をすてた民主国家に更正し、その変貌の姿は昔日の比でない。この相対的変化は、ただに伝統的な親善感情をよみがえらせたのみならず、相互にこだわりなく交渉する協和的空気を温めているのである。今日、共存共栄に向う日英関係は軌道に乗りつつある。新しい親英主義が生れる時期は到来している。

追記　板倉卓造先生が、徹底した親英主義者であられたのはいうまでもないであろう。それ故本稿は、この親英主義の問題をとりあげることにした。しかしながら、はじめその外交的側面だけをとり扱うつもりのところが、結局親英主義一般に及ぶという間口を広げることになつたため、その資料の取捨選択において、精粗適当を欠くことになつてしまつた。所定の頁数を越えたため重要と思われる資料で割愛したものが少くない。また、歴史的人物である福沢諭吉先生について敬称を省略して表現するのが一般であるけれども、板倉卓造博士という名称をつけたため、本稿に於ては特に福沢先生という名称を用いた。なお明治時代の参考資料については、外務省の大山梓事務官、本塾の手塚豊教授から貴重な示唆を頂いた。厚く感謝申上げる次第である。